

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



WEEKLY

なごや ちくさ

題字 黒野清宇

名古屋千種ロータリークラブ
 承認 1982年 8月24日
 例会日 火曜日 12:30
 毎月最終例会 18:00
 例会場 愛知厚生年金会館
 事務局 TEL763-5110 FAX763-5121
 会長 和田正敏
 幹事 田部井良和
 会報・雑誌委員長 宮尾紘司

No.37

ロータリー2000：活動は一堅実、信望、持続

ROTARY 2000：ACT WITH CONSISTENCY, CREDIBILITY, CONTINUITY

1999～2000年度 RI会長 カルロ・ラビッツァ

きょうの例会

第849回 平成12年4月25日(火)

花祭り例会

(第8回ライラセミナービデオ鑑賞) 於：松楓閣

先週の記録

第848回 平成12年4月18日(火)

晴

◆“奉仕の理想”

◆出席報告

会員	71(65)名	出席	55名
出席率	84.62%		
前々回	4月4日	(修正出席率)	96.92%

◆ビジター紹介

1名

◆ニコボックスは紙面の都合上、次回掲載と致します。

古稀お祝い



4月1日に70歳を迎えた大谷 和雄君に、会長よりお祝い金と花束が贈られました。

大谷ライラ実行委員長よりお礼挨拶

ただいまは、お祝いとお花を頂戴致しましてありがとうございました。

先日の地区協議会でもまわりの方から“いいライラだった”と伺い、小山・大口両実行委員長を始め、各委員、多くの皆さんの手作りで懸命に、又“成功させよう”と意欲のもと、お一人お一人の力がエネルギーとなって結集した結果となったように思います。

ご協力、お力添え有難うございました。

田部井幹事報告

1. 次回例会は4月25日(火)、場所を変更し松楓閣にて6時より花祭り例会を開催致します。例会前には4時30分よりライラセミナー反省会を致しますので担当の方はお集まり下さい。

和田会長挨拶

今日は私の本当の誕生日です。

昭和21年・1946年4月18日を高校3年生まで自分の誕生日と思い込んでおり大学受験の願書を書くため戸籍謄本を取り寄せたところ私の生まれが長野県であることは知っていましたが、生年月日を見て驚きました。(昭和貳拾壹年四月貳拾八日)と書いてあり、どう見ても(拾八日)と読めない。

「役場が間違えたのか? 書き間違えることもあるか? いったい僕はだれだ? なぜ、生まれた日が違うのだ?」受験前の大変ピリピリしている時で、真剣に悩んだことを覚えています。母に尋ねると「長野県の田舎に疎開し、大変な時だった。むかしは遅れて届けるのが当たり前で(おひろい)の風習もあったよ」と説明を受け、しぶしぶ引き下がったよう記憶しています。

またものごころがついてから高校まで、私の名前は『憲憲』でしたが正式な戸籍名が『正敏』であることに気がつき生まれて初めて『正敏』と願書に記入しました。この2つの名前の間に『全弘(まさひろ)』と言われた時もあったそうです。母の話では「どうも父が姓名判断にのめりこんでおりその理由の1つは、将来の父と私の関係に問題が生じる事を恐れた。」とのこと。その時母は「魚だって大きくなるにつれ、呼び名が変わり、出世魚と言われるよ!! 秀吉を考えてみなさい。サル・サルとばかにされても、日吉丸から藤吉郎、関白豊臣秀吉に成ったよ」となぐさめてくれました。

ニックネームは「ワンちゃん」です。小学校の時からなぜかそう呼ばれていました。

もう少しで「ワンちゃん」から「わんじーい」となるのでしょうか? これからも「ワン」をよろしくお願いします。

◆卓話

“邦楽「清元」と私”

会員 鈴木 正男君



趣味には、自分の好みから入ってゆく趣味と、他人から半強制的に薦められて断わり切れずにその仲間入りする趣味があると思います。私が趣味として清元を習い始めて、今年で33年になりますが、私がこの道に入ったきっかけは、正に後者の場合でした。

私が師事している清元榮三師匠は、現在我国の清元業界を代表する立三味線の第一人者ですが、今から34年前の昭和41年当時は、同師が直弟子であった清元榮寿郎師（昭和の名人と云われた三味線弾き）が亡くなられて3年後の頃で、未だお若く無名の存在でした。榮寿郎師と生前親交の深かった先代西川流家元西川鯉三郎師は、榮三師の将来性を見込まれて、師を後援すべく同家元の本拠である石川橋のお稽古場をホームグラウンドにして、毎月榮三師を東京から招き、西川鯉三郎、司津ご夫妻を始め名取さん達数人がお弟子となって最初のお稽古が始まりました。昭和41年秋のことです。

丁度その頃、たまたま私が仕事の用件で、舞踊家西川鯉次郎師（故人）宅を訪問したときのことでした。西川家元から「女性中心の清元のお稽古を旦那衆にも広めたら」という話が出たとのことで、鯉次郎師から「私も始めるから貴方も始めなさい」と半ば強制的に誘われて入ったのが「清元」との最初の出会いでありました。

昭和41年10月から、市内中区住吉町の鯉次郎師宅でお稽古が始まりました。私は、小唄も習ったことも無く、当初は暫くの間はテーブル取りも許されず、専ら師匠よりの口伝で唄うのですが、家に帰れば直ぐ忘れて復習のしようもありませんでした。一体、清元とはどんな邦楽なのか、唄い方を教わってもサッパリ判らず、もともと好きで入った道ではありませんから全くの悪戦苦闘、毎月の稽古日が近づくと、楽しいどころか不安と憂うつの数カ月が続きました。

明けて昭和42年2月1日、私が稽古を始めて未だ半年も経たぬうちに、第1回の発表会がその名も「名榮会」として、西川家元舞台に於て開催されました。出演者は、西川家元ご夫妻、鯉次郎師他名取の女性陣が殆どで、ズブの素人としては、私一人のみの出演でした。演目は「夕立」、私が清元を習って始めて唄った名曲です。

おかしなもので、第1回の発表会を終わってみると、

漸く清元の世界が僅か乍ら見えてくるようになり、それにつれて稽古も次第に楽しくなって来たから不思議なものです。

名榮会の発表会も、昭和42年発足以来、今年で第30回を迎えます。

清元の素人愛好者が、30回に及ぶ発表会をほぼ毎年わたって恒例的に開催する例は清元業界では私共の名榮会が唯一とのことで皆が誇りに思っています。

今回は、第30回を記念して、清元宗家の七世清元延寿太夫が、現在出演中の四国から当日駆け付けて特別出演して祝って頂けることになっています。

さて、清元節は、三味線音楽の系統に属します。我国の邦楽の内、三味線音楽は江戸時代以後盛んになりましたが、それは浄瑠璃系と長唄系に大別されます。浄瑠璃系は「語り物」で長唄系は「唄い物」です。

清元節は、浄瑠璃系で文化11年（1814）初代清元延寿太夫が創始しました。清元節は、江戸末期の爛熟期に生れた最新の浄瑠璃で、従って時代を背景に、初期の頃は、頗る頹廢的で軟派な浄瑠璃であったようです。

然し、五代目延寿太夫（近世の名人と云われた。昭和18年死去）が頹廢的要素を近代的なセンスで洗い上げ現代に通じる清元を確立したと云われています。

曲は、粹にくだけた節廻しで、軽妙洒脱、総体に早間で、きびきび運ぶ歯切れの良さ、特に、高音部の節廻しが特徴です。

歌詞には、地口、洒落が多く、これらを合せて当時の粹でいなせな気風を好んだ江戸っ子気質に合って盛大になったと云われます。

清元の曲は、知られているもので約110曲、その内現在、清元業界で演ぜられている曲は約半分、また素人芸の私達が習う曲は、約40曲です。私達名榮会は、1年1曲を習って発表会で演じています。

私の後半生は、結局、清元を最大の趣味として生きてきたこととなります。私にとって、清元の魅力とは何なのか？

第1に、先に述べました清元節の曲、歌詞が大変魅力的に感じることです。

第2に、清元は、歌舞伎舞踊の伴奏音楽としての舞台音楽ですから、日常使わない腹から大きな声で、かつ、邦楽の中で最も高音域で唄いますから、大変健康的で、ストレスの解消に大いに役立っています。

第3に、清元は、江戸物ですから、セリフの稽古が、名古屋のなまり言葉の矯正に役立っています。

第4に、清元のお陰でカラオケ特に艶歌が唄い易くなりました。……等々。

私の後半生に、心の豊かさゆとり、そして日常の暮しにリズムと潤いを「清元」が与えてくれたことに私は感謝しています。

これが趣味の醍醐味というものなのではないでしょうか。

◆次回例会（5月2日）

卓話“私がロータリーから得たもの”——回顧と展望——

会員 西川 豊長君